

2015 年度後期 授業評価アンケート結果に対するコメント

—文芸学部—

文芸学部長 村瀬 鋼

今年度後期の授業評価アンケートは、文芸学部では 461 科目を対象として実施され、回答科目数は 409 科目で、回答率は 88.7%であった。これは昨年度後期の数値（対象科目数 420 科目中、回答科目数 368 科目、回答率 87.6%）とほぼ同水準である。また、このうち実施必須科目については対象科目 247 科目中 246 科目について回答を得ており（昨年度後期は 225 科目中 219 科目の回答）、担当教員により授業評価アンケートが十分満足のいく仕方で実施されていると判断してよいだろう。

集計結果については、1～13 までの設問に関して、ここほとんど数年間大きな変化なく 4 以上の高評価を維持している。評価が最も集約された形で表現されていると思われる設問 12 の「総合的にこの授業を評価できる」に対する回答の平均値は、2015 年度 4.38（前期 4.29、後期 4.44）であった。また、その他の数値で目立って特に高い値をつねに維持しているのが、設問 8 の「授業への教員の熱意を感じた」への回答平均値である（2015 年度、4.44）。これらの数値は全学平均（2015 年度、設問 12 は 4.30、設問 8 は 4.33）、と比較しても高く、4 学部中で最高である。このことは、文芸学部の授業が、熱意ある教員たちによって、学生を十分に満足させるべく行われているということをうかがわせ、またそのことは、私が日頃周囲で見聞きしている文芸学部教員たちの授業の実際を思い起こしても、よく納得のいくところである。

反面、設問 14「予習または復習をよくした」への回答平均値が 3.50 と、他に較べて目立って低いのが気になるところではある。教員の熱心さに比して、あるいは場合によっては授業そのものが充実しすぎているからこそ、授業外での学習をあまり行わなくなっているのかもしれないと懸念される。ただそれは、昨今の学生たちの、課外活動や就職活動やアルバイトに追われる極度に忙しい生活を考えれば、無理からぬところもあるのかもしれない。学生たちに、授業について授業時間外にゆっくり反芻し、進んだ学習ができるような、そのような余裕のある自由な時間をもっと豊富に与えたいところである。

このアンケート結果から見るかぎりでは、総合的に、文芸学部の授業はおおむねのところ毎年度安定して、学生を満足させる仕方で十分に健全に行われているように思われる。ただし、アンケートの数値というものは、実際の現実を十分明瞭に表現しているとはかぎらない。数字には表れないさまざまな問題や、また反対に、数字にはならない良さというものもあるであろう。場合によっては、そもそも学生に十分な判断能力があるのかどうかをも考えてみたとき、設問 12 の「総合的にこの授業を評価できる」の回答数値が低い授業、学生からすれば「よくない授業」と思われる授業の方が、却って長い目で見れば、数値が高い授業よりも教育的には良い授業であったことになるケースも十分にありそうに思われる。

文芸学部としては、このアンケート結果を参考にしながらも、今後とも、学生にとって本当の意味で授業をつくりあげるべく、個々の教員において、また学部全体としても、努力を怠らない所存である。